令和3年度　「東国文化自由研究」

グンマの名の由来

～小さな川から始まる壮大なテーマ～

高崎市立群馬中央中学校

1年　5組　26番

氏名　平山 直汰

提出日　令和3年8月23日

１．調査動機

ある日、家族で出かけた帰り道、車川という川があった。
そういえばこの辺に、知り合いが通っていた「車郷小学校」がある。
僕は、他人も認めてくれるほどクルマ好きで、なぜクルマが付くのか気になった。
以前に、歴史に詳しい先生から、『必ず地名には意味がある』と聞いた。
母からも『群馬の由来は諸説あるが、クルマが由来になった説もある』と教えてくれた。
群馬はクルマと、どういう関係があるのか疑問に思い調べてみることにした。

２．調査方法

家にある、かみつけの里博物館の図録やインターネット等で調べていく。

調査内容

かみつけの里博物館の図録を見てみると…

仮説１・・・車持氏の存在

仮説２・・・馬の存在

上記の仮説２点がある。まずは、仮説１から調査していく

くるまの松の碑

車川

仮説Ⅰ

榛名山の東南麓に、かつてこの地を治めた古代豪族の巨大な「館」と「墓」が残されている。群馬町の「三ツ寺Ⅰ遺跡」と「保渡田古墳群」（5世紀後半）がそれだ。

三ツ寺Ⅰ遺跡は日本で最初に発見された、国内でも最大規模の豪族の館跡（豪族居館）である。幅30cmの堀の中に一辺86mの内郭が構えられている。
上越新幹線と県道前橋安中線の交差部にあり、現在は新幹線の下に位置する
これらを築いた豪族は、後に「車持氏」と呼ばれた氏族だったとする説がある。
古墳時代から奈良時代、この榛名山東南麓一帯は「車」の地名で呼ばれたが、それは車持氏が居住したためであるという仮説だ（尾崎喜左雄1974『上野国神名帳の研究』・前沢和之1988「三ツ寺Ⅰ遺跡の性格と意義」『三ツ寺Ⅰ遺跡』）。

ここまで調べて僕は驚いた。通りなれた道に三ツ寺Ⅰ遺跡があるのは知っていたが、今回のテーマの主人公かもしれないとは…
（右の写真）現在の三ツ寺Ⅰ遺跡。
ここは、遺跡があったように見えず看板があるだけで、寂しい雰囲気があったので、さらに興味を持った。車持氏が住んだかもしれない三ツ寺Ⅰ遺跡をさらに詳しく調査する。

三ツ寺遺跡（三ツ寺I遺跡）

三ツ寺I遺跡（高架下とその周辺に所在）

Wikimediaより

三ツ寺Ⅰ遺跡

保渡田古墳群に近い高崎市三ツ寺町・井出町にある、5世紀後半（古墳時代中期）の全国で初めて古墳時代の豪族の館が発見された遺跡。
一辺90mのほぼ正方形の敷地は、幅30cm～40m、深さ3～4mの広大な堀で囲まれ、柵をめぐらされた内部から、大型の建物や竪穴住居、まつりの場などが見つかった。

三ツ寺Ⅰ遺跡の地図

それまで古墳時代の豪族の館は家形埴輪などから想像するだけだったが、三ツ寺Ⅰ遺跡の発見によって、当時の豪族の館の構造や暮らしのようすが具体的に判明した。

近くにある保渡田古墳群は豪族の館と同じ時代のもので、保渡田古墳群に葬られた豪族が、生前、この地を治める拠点として館を使用としたと考えられる。

館の構造

館は、猿府川の流れを利用して造られている。
川にせき出した台地をＬ字形に振り割り、川を堰き止め、その水を流し込んで豪（水掘）とする。豪は幅 30m, 深さ 4m。豪に囲まれた内部に土を盛り上げ、斜面に石を貼り付ける。館の本体は１辺 86m の方形。
幾つもの張り出しが並び、三重の柵で中を目隠しする。その内部は柵で大きく南北２つのゾーンに仕切られている。南側は、王が政治や祭祀を行った公的なゾーンとみられ、大型の建物や井戸、石敷きの祭祀場２か所などがある。
石敷きの延長線上には、豪をまたいで水を導く水道橋が発見された。
外から清水を流し込んで、儀式を行ったのだろう。北の区画は、ほとんどが発掘されていないが、竪穴住居が見つかったため、王の従者などが館の機能を支えた場所だと推定されている。

先進の技術

館の建設には、川の流れを制御する築堤技術、清水を導く測定技術が投入されており、水を操った農業王としての技術の粋が凝縮されている。
また、北ゾーンには金属を加工した工房があったと推定されている。
これも当時としては先進技術だった。
詳しく調べていきたい。

出土品が語る先進技術

金属を溶かす道具
他は燃焼炉に空気を送る羽口。右下は溶かした金属を受ける皿

鍛治工人の道具を鍛える人

古墳の堀の掘削は、鋤や鍬などの堀り貝を大量に使い、全ての人で行われた。岩盤を掘り抜くため、道具の先には鉄刃がはめてあった。

当時貴重だった鉄の道具は王が貸し与えた。工事で傷んだ刃先を再生させるため、現場では鍛冶工人が活躍したのだろう。

鉄の加工は先端技術であり、彼らはハイテック技能者として待遇されたのだろう。

この時代から、鉄を使用するようになったと知り感心した。

左／スコップの祖先
右／柄と組み合わせて使う

鋤とナスビ形農耕具・・・右はナスビ農耕具と呼ばれている。ナスでいえばヘタにあたるところに柄を付けるが、付ける柄によって鍬にも鋤にもなる。

左は木製の鋤。当時鉄は貴重なものだったので全て鉄にするわけにいかなかった。

1500 年前のスコップなのにも関わらずほぼ同じ形なので驚いた。

三ツ寺Ⅰ遺跡に住んでいたと思われる車持氏とは…

平安時代の『新選姓氏録』（貴族の系統を記した書）によれば、「車持氏」は群馬県地域出身の有力貴族「上毛野氏」と先祖が同じだという。また、古く雄略天皇（5世紀後半）の時代、天皇が乗る輿を献じたため「車持」の名を与えられたとされている。
車持氏は、職業集団「車持部」を束ねる職務をその名にしていたとされている。このため、古くからヤマト王権に接近した最新的な氏族だと思われる。
奈良県には、車持氏の主流は都の貴族となっており、天皇の側近として重要な宮延行事を代々にわたって司っていた。

古代の「車」とは何か？

奈良時代より前、車輪のついた乗り物は確認できない。この頃「車」とは、貴族を乗せて担ぐ「輿」を指していたようだ。輿を使える人物は、限られており、「車」・「輿」は天皇の代名詞として用いられる語でもあった。
例えば「宮」は本来、宮殿建築のことだが、そこに住む貴族その人を指す代名詞として用いられる（宮様・〇〇宮）。これと同じように、皇居から外へ巡行する天皇を、その名前に因んで「車駕」と呼ぶ規定されていたのである。

奈良時代の都に実在した車持氏

長岡京年（784-794年）は、平安京（794年・現京都市）の前に営まれた都であるここから貴族の屋敷跡が発見され、出土した土器には、「車宅」の文字が書かれていた。「車宅」とは、「車持氏の邸宅」の意味である。他にも、長岡京に先立つ平城京（710年-784年）からも「車持氏」の名を記した木簡が出土している。

車持氏と藤原不比等

奈良～平安時代に朝廷で権力を振るった藤原氏。
その繁栄は「大化の改新」（645年）の参謀「藤原鎌足」とその子「藤原不比等」から始まった。不比等の母（鎌足の妻）は車持氏の娘であり、車持氏と中央政界との深い関係がうかがわれる。
幼少期の不比等は、事情で「田辺史氏」の家で養育された。
田辺史氏は文化的な渡来氏族であり、後に上毛野氏に姓を変えていることから、上毛野や車持氏と近しい関係にあったのだろう。

仮説２

なぜ、「車」に「群馬」の二字が充てられたのか。「群馬」を「　クルマ」と読ませるのはやや強引であるが、そうさせる歴史背景があるはずである。

それはやはり、この地で馬がたくさん飼産・生産されていたと考える。

かつて馬は貴重な財産であり、「車」の地で５世紀にはじまった馬生産は、いわば、先進産業の走りだった。そのため、馬が群れている「群馬」の字が、めでたいものとして選ばれたのだと推測する。

馬生産は現代の自動車産業の匹敵

古墳時代になるまで、日本に馬がいなかった。
古墳時代も５世紀になると馬具の出土が増えてくる。
このころ、朝鮮半島経由で馬の生産システム（繁殖・飼育・調教・馬具生産）がセットで導入されたのだ。それを推進したのは渡来人技術者であった。

古代の馬の生産は、人力以外の動力の導入という点で、現代の自動車産業に等しいエネルギー革命でもあった。

① 象徴・財物としての馬＝リムジンカー
　駿馬は、豪族達の財産として、豪華な馬具と共に珍重された。

② 高速移動手段としての馬＝乗用車
　役人の命令達のスピード化のため馬が使われ、直線的な幹線道路と馬乗り継ぎ跡（駅家）が整備された

③ 戦の道具としての馬＝戦車・軍事用
　奈良時代の蝦夷との戦いには多数の軍馬が徴発され、以後騎馬戦は戦の要となる。

④ 運搬具としての馬＝トラック
　駄馬は荷役にも投入された。人の何倍もの荷物を運搬できた。

⑤ 農耕具としての馬＝トラクター
　馬に大型の鋤をひかして、人力の数倍も耕運作業がおこなわれた。

馬生産の始まり

群馬県地域での馬生産はいつから始まったのだろう？

① 群馬町三ツ寺Ⅰ遺跡では、馬の歯が出土した。豪族の愛馬だろうか。

② 高崎市剣崎長瀞西遺跡からは、5世紀後半の馬骨と馬具が出土した。
東日本で最古クラスの事例である。

③ 子持村白井地区の遺跡からは、榛名山の噴出物に覆われた無数の馬の蹄跡が発見された。独立台地の上に、広く馬が放牧されていたのである。

④ 子持村黒井峯遺跡では、火山噴出物の下から、家畜小屋５棟を有した集落（世帯）が、検出された。

このように、5世紀後半から6世紀前半には、「車」の地で、広く馬の生産・飼育・管理が実行されていた。国内でも早い段階で馬の生産に着手したと言える。

近年、メディアが「日本のポンペイ」と報じていて気になっていた、④の黒井峯遺跡を調査する。

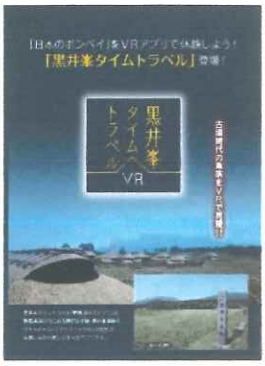
黒井峯遺跡

黒井峯遺跡は、古墳時代の集落遺跡としては日本で最も有名な遺跡のひとつである。今から、訳1500年前に榛名山神社が大噴火を起こし、その時に降った軽石が2m以上も降り積もり、この集落を埋め尽くしてしまった。　火山活動によって壊滅したイタリア古代都市ポンペイにならい「日本のポンペイ」と言われ、国内では唯一無二の遺跡である。

今から約30年前、本格的な発掘調査が行われ、それまでは知ることができなかった豊かな古墳時代の人々の暮らしぶりが次々に解明されることになり、研究者や歴史ファンを驚愕させた。住まいとして建物のほか、作業小屋や馬小屋など様々な種類の建物、柴垣、畠、道、広場など、他の地域の遺跡では発見されることが極めて困難といえる種類の遺構が多数検出されている。

黒井峯遺跡の VR について

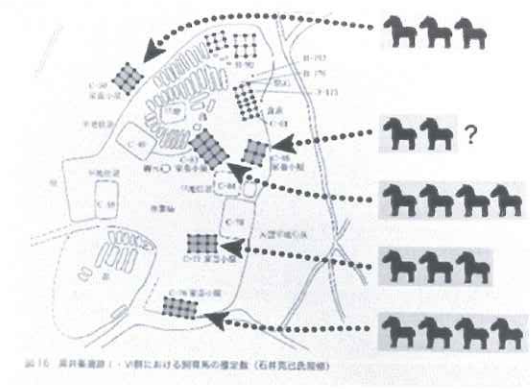
黒井峯遺跡について調査していくうちに、VR があることを知った。
早速、興味を持ったので群馬県のホームページからアプリをインストールして現地に行った。



群馬県ホームページより

現地に行って、QR コードが付いている看板（ぐんまちゃんが描かれている）にスマホかざすと、上記の CG が現れる。何もない場所のはずだが、古墳時代の人々の暮らしが見えてくるようだった。

馬小屋と馬数の推定　～黒井峯遺跡 I・IV 群～



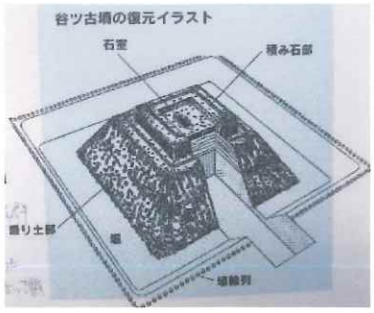
「家畜飼いの家単位群」とされる黒井峯遺跡 I･VI群では、5 棟の家畜小屋が存在し、その多さが他の単位群とくらべて際立っている。5棟の家畜小屋は、それぞれ、内部の仕切り構造の様相から、何頭の馬を納めることができたかが推定できた。C-76号家畜小屋と B-83 号家畜小屋では4頭、C-77号家畜小屋と C-50 家畜小屋では3頭、C―85号家畜小屋では、2頭(？)の馬が納めていたと推測。
各家畜小屋は、垣と連結している小屋(C-76号)や単位群の母屋的な平地式建物に出入り口が接している小屋(C-77号)、畠に接している小屋(C-83号)など多様だ。
これらの多様性からは、家畜小屋の活用が、馬の種類や生育過程の違いに合わせて、異なっていたことを予想させる。

馬生産と渡来人と三ツ寺 I 遺跡の主

渡来人は主に技術者で、三ツ寺 I 遺跡跡の主を中心とする当地の豪族連合体が、ヤマト王権に働きかけ、誘致を成功させたものであろう。豪族らが期待した新技術のうち、主要なものの 1 つが馬生産であった。『日本書紀』には、上毛野氏の始祖が朝鮮半島に赴き、軍事・外交活動を行ったという伝承が記されている。このようなヤマト王権の公務を通じて、当時の豪族が外国文化に接触した可能性も考えておく。

三ツ寺Ⅰ遺跡の王と一緒に、先進技術を進めたと思われる、渡来人の古墳が箕郷町で、発掘された。

下ツ芝谷古墳



下ツ芝谷古墳昭和 62 年、箕郷町下芝から発掘された。一辺の大きさが２０ｍの方墳で傾斜角が非常に特異な形状。墳丘は上下二段に仕上げられているが下段は土を盛り上げ上段は石だけで構築した「積石塚」。
積石塚は、日本古来の物でなく朝鮮半島北部がその源流。円筒埴輪も並べられていた。
葬儀用の金のクツや馬具、甲冑、武具も発見された。

実際に行ってみると、住宅地にひっそりとあった。
看板が無ければ分からないし、左上のイラストのような古墳があったとは思えない。
しかし、近づいてみると積石塚の特徴である方形と、盛土が少し感じられた。

感想

仮説１の「車持氏の存在」では、三ツ寺Ⅰ遺跡をきっかけに、館、先進技術、ヤマト王権との繋がりが調査できた。

仮説２の「馬の存在」では、先進産業だということをきっかけに、黒井峯遺跡を調査できた。どちらの仮説が正しいのかは、考古学者でもわからないので、僕たちにも分からない。だが、これらを想像するのが歴史の面白さだと思った。
本調査の調査動機は、小さな川から始まったが、これほど壮大なテーマになった。
これからも小さな疑問でも調査する好奇心を持ち続けたい。

＜参考文献＞

『よみがえる五世紀の世界』かみつけの里博物館 1999 年　かみつけの里博物館
『東国文化副読本～古代ぐんまを探検しよう～』 2018 年　群馬県
『海を渡ってきた馬文化～黒井峯遺跡と群れる馬～』 2017 年　群馬県立歴史博物館
『グンマはクルマから始まった～謎解き「群馬」の名の由来～』2001 年　かみつけの里博物館